
勇者の為の魔王軍

進士夜紳士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の為の魔王軍

【Nコード】

N1298V

【作者名】

進士夜紳士

【あらすじ】

これは、魔王と勇者が織り成す、破天荒な物語である。

「何故……勇者が来ぬのだッ!!」

全世界が魔王軍という闇に染まり、十六年。魔族は人類を支配し、一方的に隔たりを設け暮らしていた。

魔によって与えられた幸福。敗れた勇者達。魔と人の歪な関係。氷上に立つような、仮初の平和。奇妙なバランスが成り立っている世界。

そんな変革を迎えたばかりの中、二代目魔王は順風満帆な生活を送

っていた。

とある一つの悩みを除いては――

本編は一話三部構成（ナレーション↓勇者側↓魔王側）となっております。

第一話 表：弱虫な勇者 裏：オレ様な魔王（前書き）

● 一話の登場人物

????：ナレーシヨン

ポリジ：弱虫

シュロ：いじめっ子

デンファレ：二代目魔王

サルビア：魔王に仕える大臣

ハナズオウ：四信の一人

第一話 表：弱虫な勇者 裏：オレ様な魔王

暗雲に轟く雷鳴、吹き荒ぶ竜巻がステンドグラスを叩く。
時はグランドー暦1250年——人類最後の砦、グロリオサ城王座。

ここに、二つの『正義』があつた。

「人々が平和に暮らす為には、魔族なんて必要ない！ 今日で決着をつけるぞ——魔王ッ！！」

気色に光り輝く最強の剣を携え、堅牢なる最高の鎧を身に纏い、美しくも鍛え上げられた最上な兜を被る。あらゆる英知を結集させた最終装備。爛々とした蒼い瞳に、凜々しい顔立ちは純白そのもの。そして何より、どんな強大なる魔だろうと決して恐れぬ心。希望を託され、芯を支えられ、盾となり守ることで増す力。その慈悲に溢れる姿は、まさしく最愛の戦士。

人は彼を——勇者と呼んだ。

「結局、貴様と我は戦う定めにあつたのか……もはや逃れられない宿命であるう。全くもって名残惜しい。交える道もあつただろうに」

男は、懐かしむように閉じていた眼を——開いた。

「だが……しかし！ 我が成しえる霸業を阻み、怨敵として仇なすのであれば、容赦はせん。揺るがぬ信念を背負い、来たれ——勇者よッ！！」

乱れ躍動する漆黒の長髪、威圧が形を成すが如く肩から真紅のマントを羽織らせ、褐色たる肌の両手には魔力の塊を持ち、見る者に畏怖と震撼を与える闘気を放つ。

いかなる局面であっても、その尊大なる姿勢は崩さない。大を覆す小、革命を掲げた無類のカリスマ。

敵味方双方から畏敬された彼は、誰とも無くこう評された——魔王と。

根絶による平和と支配による平和。目指す先は同じとはいえ、それでも争いが生じてしまう。

どうあっても相容れないプロセス。因果に翻弄された勇者と魔王が、そこには居た。

どちらも引けない事情を抱え、幾度となく衝突しあった仲だった。互いを認め、互いを憎み、互いを笑い、互いを呪う。

その長きに亘る激闘の連鎖も……この場で終焉を迎えるのだろうか。

チャキリと、手にしていた刃が鳴いた。

勇者が真横に構えた、装飾の乏しき剣。だがしかし、特質すべきは剣の形状にある。

一見して何の変哲も無いロングソードに認識できてしまう、その刀身には——穴のような空洞が開いていた。

そう、その勇者の剣には、内外に切り刃が備わっているのだ。

通常で考えれば、それは脆く容易に破損せしめる要因に違いないのだろうが、それでも勇者は邁進する。

闘気を漲らせ、正面だけを真っ直ぐに見据えて。

「——決めるッ！」

腰を引き、膝のバネを弾いた。

玉座から謁見の間までの階段を、ひたすらに駆ける。衰え知らずの疾風迅雷。

ぽっかりと開いた剣の空洞が、通り抜けた気流を裂いていった。

否、切り裂いてはいない——空気そのものが、剣の刃に吸収されているのだ。

脈動するかの如く、その剣は勇者と共に輝きを増していく。

ギリリと、限界まで握り締めた拳が悲鳴を上げた。両手に収まっていた魔力の塊は、今や様態を変え、魔王の素手に纏わり付いている。

あまりにも極大した力は、自らの肌をも突き刺す。どす黒い炎に似た魔力が、腕の皮膚を焦がし焼損させているのだ。しかして、魔王の表情は変化しなかった。

「——降れ」

呟き、正面で拳と拳を組み合わせる。指が交差する度に、身を擦りそうな苦痛が襲う。

時が無い。刻が有る。

人間の頂点である玉座に向かい——気付けば、魔王は歩んでいた。今までも、そうしてきたように。これから、そうするように。己の力で、未来を掴み取る。

「おおおおおおオオオオ!!」

「はああああああアアッ!!」

語るべき言葉は霧散した。

咆哮で示す、思いの強さ——共に一撃死力。

そこには一切の油断も計りも許されはしない。それ即ち敗北を意味する愚行に等しいのだから。

故、勇者は渾身の必殺を剣に乗せ、魔王は禍々しい必滅を拳骨に宿す。

いずれ、この魂が朽ちようとも。たとえ、この身が引き裂かれようとも。

往くべき未来は勝利の結末しか有り得ない。

電光石火の閃が重なり合う。

刹那、稲妻が炸裂したかのような爆裂音が一帯に響き渡った。

凄まじい衝撃波が輪となつて広がり、そこかしこへ裂傷を生む。それは勇者と魔王にとつても例外ではなく。

最強と名高い剣にヒビが、最凶と謳われた拳に亀裂が走る。

衝突による火花で照らされ続け、モノクロの点滅を繰り返す周囲の建造物。その中には見えざる大気の奔流に耐え切れず、原形を崩し瓦礫と化す物もあつた。

「滅びろおおお、魔族ッ!!」

「退けえええい、人間ッ!!」

あらゆる贅が捧げられ、糧とし渦を巻くエネルギーの嵐。

拮抗した黒白は天空へと飛散し、荘厳な円蓋と立ち込めた黒雲に巨大なる風穴を開けた。地上から放たれた流星の光は円形状に開かれた青空へと消えていく。

先程までの暴風が幻影とでも言わんばかりに、丸く晴れ渡る空。それは、あたかもスポットライトのように二人を照らしていた。

「……が、はっ」

「ぬ……う」

打つて変わり地上では、激痛に零れた呻き声が挙げられた。

死力の代償は満身創痍。

ついには膝が折れ、前のめりに倒れ伏せる二人。

釘で磔にされたかのように硬直していく体。

信頼を寄せる仲間達は、この場には居ない。正真正銘の一对一。

故に、ここからは未知の領域なのだ。限界を超えた者のみが到達し得る頂。

薄れゆく意識の中……数多の嘆きが、大衆の懇願が、魔物達の悲哀が、苦しくも険しい道のりが走馬灯の如く蘇り、伽藍堂^{がらんどう}となつた彼らに再び活力を注ぐ。

先に立ち上がった者が勝利する——勇者と魔王は、暗黙の内に理

解した。

頭上から差し込む黄金の太陽、蒸気と粉塵、砂埃が舞う中央……
僅かに、指の先端が動く。

今まさに、一人の男が、立ち上がろうとしているのだ。

つたない…… さながら産まれたての小鹿のように、弱々しくも、
しかし確実に。

這うように身を起こし、軋む足を押さえつけ、ゆっくりと背筋を
伸ばす。

敬意の戦勝宣言。

額から“青い鮮血”を流し、霞んだ眼で“勇者”を見据え、“魔
王”は口を開いた。

「我の……勝ちだ」

そうして彼は、伝説に刻まれた。

なあゝんて中二病っぽく喋ったりしちやったりしてっ！

でもでも違う違あう！ ボクちゃんが見たいのは、そーゆー筋書
きじゃないんだ。ありふれた英雄譚は、ありがちな創作世界だけで
充分だからね。ハッピーエンドは二次、バッドエンドなんて三の
次、人の生は行路なエンドレスエンドなんだから。

えっ、だったら何が見たいんだって？ ふっふうん、しからば
教えてしんぜよう。

ボクちゃんが望むのは、何を隠そう……ギャグテイスト満載な喜
劇であり、ちょこっと泣ける悲劇であり、ドタバタ動き回る活劇で
あり、生活感溢れる家庭劇であり、なんだかねで演劇だったスト

ーリー。

常識なんてブツ壊して、既存という王道を蹂躪しまくり、とち狂ったネジを齒車にするような——そんな、お話。

退屈しのぎの暇潰しには、それぐらいで丁度いいよね。

さてつと、それじゃまあ長々とした英雄譚（笑）な前説はこの辺にして、そろそろ本編へ移ってみるですよっ！

これは……そう、さっきの大戦から十六年後の世界——記念すべき第一話の表は、戦いに敗れた勇者側から見ていこうかな。

んじゃ、そんな感じでレッツラゴー！

▼ ▼

どうして皆……お父さんを責めるんだろう。

僕には分からない。

木こりのお仕事だって、一週間に一度だけどしている——ちゃんと、誰かの役に立ってるのに。

お休みの日は家で寝てるか、近所のお酒屋さんへ行っちゃうんだけれど——それはきつと、家じゃくつろげないから、外で疲れてるのを癒しているんだ。

お爺ちゃんや僕に怒鳴るのも——お母さんが病気で亡くなって、悲しくて傷ついてるからなんだよね？

なのに皆、お父さんを悪く言う。

「こんな生活になったのは、全部お前等の所為だ！」

「のうのうと国に援助されやがって……楽しんで暮らしてんじゃねーよ」

「死んで詫びろ！ この“元”勇者が！！」

十六歳になったばかりの僕は、何も知らなくて。

お父さんが勇者だった頃は生まれていなかったし、誰かから冒険の話聞いたことも無かったから。本当のことは分からないけれど、
だけど……お父さん達が皆の大切にしていたモノを壊してしまつたのは、なんとなく伝わった。

皆、お父さん達が嫌いだ。約束を破られた、期待を裏切られた、とても幻滅したような眼で……僕達家族を見る。

でも、一番辛いのは僕なんかじゃない。お爺ちゃんや、それにお父さんだつて胸が締め付けられるような思いをしている。

それはきつと誰かの痛みで、もしかしたら当然の報いなのかもしれない。

うん……昔は酷かった“イヤガラセ”も、今は段々と収まつてきている。

……ううん、違うのかな。そう思いたいののは、僕だけなのかも。そんなことすら、確かめる手段がなくて……うる覚えなお母さん以外は、お父さんの仲間だった人達も顔すら見たことがなかった。いつまで、こんな生活が続くんだろう。耐えられるんだろうか、時々不安になる。

それでも、僕は――

『ポリジだけは、皆と……お父さんを恨まないであげて』

「はあ」

ため息で始まる朝。運動不足がたたつて、筋肉痛が辛い。

僕は一人部屋で寝ているお父さんを起こさないように台所へ行く。三人分の朝食を作りながら、小窓から入り込む陽気を仰ぐ。うん、

こんな天気だったら雨は降らなさそうだ。これなら昼頃には洗濯物が乾くよね。

「ふあゝあ。お早う、ポリジ」

「あ……お早う、お爺ちゃん」

のんびりと家事をこなしている間に、お爺ちゃんが食卓へと着いた。

眠たそうな目、シワだらけの手、曲がった背筋。でも、優しいような顔。

僕はテーブルに朝食を並べて、お爺ちゃんの向かい側に座る。これが、いつもの定位置。二人だけの、朝ごはん。

「ポリジ、学校は楽しいかい？」

「……うん、とっても、楽しいよ」

いつも小声で話す食卓。

お爺ちゃんが幸せそうな笑顔になるから、僕も笑う。

「昨日もね、友達と『遊び場』まで行ったんだ。すつごく面白くて、家に帰るの遅くなっちゃった」

「そうかそうか、それは良かったのう。家事のことはワシに任せていいから、ポリジは友達を大切にするんじやよ」

「けど、お爺ちゃんだって……畑仕事があるのに」

「なあに、まだまだ若い者には負けんわい。ほれ、元気元気」

肩をグルグル回して、ポンと胸を打つ。僕の目では、とても弱々しくは見えなかった。

「……ありがとうね、お爺ちゃん」

強くて優しい表情のお爺ちゃん。なるべくなら、心配を掛けたくはない。

僕はオーブンで焼いたパンを奥歯でギュツと噛み締めた。

「ごちそうさま」

質素な朝食を食べ終わり、そそくさと食器を片付ける。軽く洗い物を済ませ、僕は寝巻きから布の服に着替える為——ハンガーに手を伸ばした。

まだ乾いていない、少し茶色い服に袖を通す。鼻に掛かる土の匂い。

学校へ行く身支度を済ませながら、泥まみれになった靴を履いた。「それじゃ、行ってきまーす」

「ああ行つてらっしゃい。『禁忌』には気を付けるんじゃないよ、ポリジ」

「うん、お爺ちゃんもね」

いつも通りの挨拶に、手を振るお爺ちゃん。

その玄関に……お父さんは居なかった。

「ポリジくん。放課後になったことだしよお、昨日みたく付き合つてもらうぜ」

「……う、うん、いい……けど」

それとなく過ごしていたら、あつという間に夕方で。何もなければ、家に帰って洗濯物を取り込まないといけない時間。

「ごめんなさい、お爺ちゃん。家事、お願いします。」

誘いを断りきれない僕の肩に、腕を回すシュロくん。その一回り大きい体の内側へ、僕はスポリと収まってしまう。

痛い。声には出さないけど、筋肉質な手で肩を掴まれて足しか動かせない。

足を向ける方角は決まっていた。

今日も、あの『遊び場』に……連れて行く気なんだ。

仲良く寄り添うように、僕達は歩き始めた。

そんな僕達を見た先生や皆は、こぞつて目を逸らす。

シュロくんが怖いんじゃないかって、僕と関りたくないからだと思う。勇者の息子という、レッテル。

話しかけても応えてくれない。近づいても遠ざけられる。落し物を拾ったら、手渡す前に逃げられたり。

学校の皆と最後に話したのは、何時だったんだろう……もう、思
い出せないや。

「……あ、あの……シュロ、くん」

「あん？ 何だよ」

「その、きよ……今日で、見つかるといいね」

「ああ？ ……あゝあ、そーだな。そーだった」

煩わしそくに、そつぽを向くシュロくん。

うん。

だから、お爺ちゃん以外の人と話すのは、本当に久しぶりだった。

「おーし、着いた。うゝん、やつぱココは清々しいなあオイ！」

「そ、そだね」

めいっばい木の香りを吸い込むシュロくん。たしかに、この空
気は町よりずっと澄んでいた。

町から少し歩いて、小高い丘を上った先。

通称、迷いの森——町の大人すら近寄らない、危険区域。

生い茂る森の中は丸ごと獣道になっていて、行商人が通る道以外
の入り口は整備されていない。それどころか、警告を報せる赤いテ
ープで嚴重に封鎖されているぐらいだ。

迷い込んで、もう何人も行方不明になっている。こんな場所、好
き好んでくる人なんて、いないのに。

日が落ちそうな空。ガアガアと、鳥らしき鳴き声まで聞こえてき
た。

帰りたい気持ちと、手伝いたい気持ちが半々。

「そんじゃポリジ、さつさと行ってこいや」

軽い調子で、ドンと背中を押される僕。茶色で短髪なシュロくん
は悪戯っぽく笑う。

「見つけたら大声で叫べよな。んで、俺が合図するまでビビって戻

つてくんじゃねーぞ」

「わ、分かった……でも、その、ほ、本当に、ペンダント……あるん、だよな？」

「んだよあ、うじうじボソボソ喋りやがって。“勇者の息子”のクセに人のこと疑うってんのか、あん？」

「や、う、疑ってる訳じゃなくて……あの、だって、この森には誰も入らないから……落としたの、違う所じゃないかって」

「……あんなあ、そーゆーのを疑うつーんだよコノヤロウ」

シュロくんは困ったように、後頭部をポリポリと掻いた。

「信じるってんのは黙って従うことを言うんだ。な、つーかよあ、俺の言ったことは全部信じてりやいっての！ 仮にもクラスメイトだろあが、あん？ 分かったらとつとと歩け！」

「う、うん……ご、ごめんね」

よく分からなかったけれど、頷いておく。なるべく人の嫌がることはしたくないから。

「ったく、最初っからそーしろってえの」

そんな言葉を背に受けて、僕はおっかなびつくり歩き出した。

シュロくんからの頼み事は、ペンダント探し。この迷いの森の中で、だいぶ前に失くしちゃったみたいなんだ。そのペンダントはシュロくんにとつて大切な物らしくて、僕は“勇者の息子”だからお手伝いしてる。

学校では誰とも話さない、避けられていた僕なのに、シュロくんは声を掛けてくれた。

それだけで嬉しくって、だから僕も——誰かの役に立ちたかったんだ。

今は“勇者の息子”でも、いい。

けど、いつかは、本物の勇者だったお父さんみたいに。

ポツリポツリと、離れた町に明かりが灯り始めた。空は赤いけど、

もう少しで夜になる。

晩御飯の準備、どうなったんだろう。またお爺ちゃんに作らせちゃったのかな。……ごめんなさい。

そんな事を思いながら、僕は赤いテープを潜った。サクツとした音を立て靴底が雑草に沈む。

何処までも深い、方向感覚が狂いそうな森。背の高い雑木林。

僕が森の奥を探索して、シュロくんは町に近い方を調べる役割だ。探し始めてから、これで十日目になるけれど、銀色のペンダントはまだ見つかってなかった。

厚い木と沢山の葉っぱに隠されて、太陽や星の光も届かない密林。周囲を包む独特な湿気。

ゴクリ——僕は息を吞んで喉を鳴らした。

気が付けば、腰が引けて足も震えている。嫌な汗が、こめかみからスウと流れ落ちた。

昼間は何てことの無かった景色が、こんなにも変わる。

それは、ただただ不気味な雰囲気で。

この気持ち悪さは、どうやっても拭えなかった。

薄暗い森は……とっても怖いから。

でも大丈夫、分かっている。その為に家から持ってきたんだ。足りない心は、道具で埋めよう。

僕は教科書の詰まった鞆の中から懐中電灯を取り出して、四角いスイッチを押した。すると、懐中電灯が周囲の『マナ』を取り込んで明かりを点ける。そして普段より、ほんの少しだけ、体が重たくなつた違和感。

「……早く、見つけてあげなくちゃ」

僕の体力から考えると、懐中電灯を点けていられるのは良くて二時間くらいだと思う。立ち止まっては、いられない。それに、シュロくんだってペンダントが手元になくて寂しくなっていると思うから、迷ってる暇なんて無いよね。

踏み出す理由は、それだけで十分だから。

「んしょ、つと」

細い枝や木の葉を掻き分けて、どんどん奥へと進む。

帰り道は憶えられないから、真っ直ぐ進んで戻るだけ。転ばなきゃ、大丈夫だ。

「あ……昨日の目印だ」

見たことがある、変わった形の木。

その幹につけた×マーク。昨日はここまで探したから、今日はここからだ。

僕はライトで地面を照らしながら、辺りを注意深く窺う。

こういう単純作業は、けっこう好きだったりする。

お爺ちゃんの畑仕事も苦にならない。それに、先生の授業も聞くことだけなら出来るから。

だから。

「……こうしてるの、なんだか楽しいな」

そんな自分の声に、耳なんて貸さなければよかった。

「……………っ……………え？」

シュロくんが困ってるのに、楽しいの？ この『小さい冒険』を、楽しんでる？

自分のことしか、考えてない。

「うわ……………僕って……………最低だ」

そんなの、悩んでいる人を見て笑うのと一緒にのこと。今まで散々……………されてきたことなのに。

そう思うと、折れ曲がった猫背が一層地面に近づいた。

浮かれてる。

なにが本物の勇者に、だ。やっぱり僕なんかじゃ、なれる訳がない。

お父さんが勇者だっただけで、僕は子供でしかないんだ。

『ポリジだけは、皆と……………お父さんを恨まないであげて』

……家に帰ったら、反省しなくちゃ。

「そうだ……ペンダント、探そう」

僕は昨日よりペースを上げて進んだ。楽しんじゃダメだ。ワクワクなんて、しちゃいけない。

心の中で呟くと、ザザアと隙間風が吹き抜けて、森全体を静かに揺らした。

葉っぱ同士が擦りあって、体に流れる心地良いメロディー。

「はー……ふう……」

落ち着きを取り戻す呼吸。汗で濡れた服が冷たくなって涼しい。自然を感じて、気持ちを入れ替えようとした、その時――

ズドンッ!!

「わっ、わ!?!」

そんな突然の地響きに、僕はバランスを失い転んでしまった。

咄嗟に、持っていた懐中電灯を落す。

山彦みたいに木霊するほど、もの凄い音だった。何だろう、ずっと奥の方から聞こえてきたようだけれど。

「な……なんだったの?」

手を着いて起き上がると、そこはいつもの森だった。

いつもの、真っ暗い森なのに。

涼しさが寒さに変わって、体全体が震えた。

い、嫌だ、二の腕に鳥肌がたってる。

僕は慌ててライト拾い、明かりを点けた。

怖い。帰りたい。変なこともあったし、今日は帰ろう。

シュロくんに謝って、許して……もらって。

肩に掛けていた鞆が、ズレ落ちそうになる。すんでのところで持ち直して、そうしていたら気持ちが薄まっていた。

「……帰ろう」

諦めて踵を返そうとした、その瞬間――僕の耳に、不自然な音が

聞こえた。

真後ろの、ライトで照らしてない所から。

「あ、れ……？」

どうしてだろう。

さつきから、バサバサと、風の音が鳴り止まない。

呼ばれているような気がして、僕は振り向く。

振り向いて、しまった。

「ガル……グルア！？ ガアツ、ガアツ……！」

それは、鋼鉄で出来た口ばしだった。掴んだ者を放さない、獰猛な爪だったんだ。

獲物を喰らう、ギラついた瞳が僕を睨む。風を裂くほど立派な、

黒色特大羽。

呆然とする、僕の目の前に。

『巨大ガラス』は、現れた。

▼
▼

ほっほーい！！ テンションMAXからの急転直下っ！

初戦闘寸前の弱虫毛虫ヘタレ少年、そんなもってイジメっ子シユ口のペンダントは見つかるのか——でもここでストップ！ ボクちゃんも続きが気になるけれど、お楽しみは第二話の表までとっておくヨ。

さあさあ！ 勇者が登場すれば魔王が現れる！ 卵が先か鶏が先か。表をめくれば裏がある訳でッ！ どっちが逆さなのかは見ている人にかかっている！？

まあまあ、この物語は順番的に魔王側が後出してことなんでヨロシクちゃん。

んじゃ、そんな感じで第一話の裏、レッツラゴー！



オレ様は、親父様のようにになりたいのだ。

「……ですから、このグロリオサ城は今や我々魔族の拠点へと生まれ変わった訳であります。ゲコ」

口を開くたびにゲコゲコと、うるさい蛙め。しかしなんだ……十六年という歳月が経ち、それも着実に慣れてしまいつつある。恐ろしいものだな、世話係というポジションは。そして、世話をされるオレ様も。

己の才と権力が、恐ろしくある。

そう……約十六年もの間、この世界は闇に覆われているのだ。

親父様が侵略し、征圧した社会。現に、魔王たるオレ様が最高位に居座り続ける国家。

だというのに――

「あの……聞いておられますか？ ゲコ」

「カエルよ、何故……勇者が来ぬのだッ!!」

オレ様の半身ほどしかない背丈。爪先立ちしながらチョークを持っていた手が止まり、暫く放心状態になる両生類。ぐぬう、忌々しい間抜け面め。

「……はい？ 突然、何を仰るのですかデンファレ様——ゲコ」

「オレ様の名前に汚らしい語尾をつけるな、カエル」

「カエルではありませんデンファレ様。サルビア大臣とお呼び下さい。ゲコゲコ」

「黙れと言ったカエル」

「はて、『黙れ』とはまだ一度しか聞いておりませんが。というか、ですからカエルではありません。またぞろ新たなる遊戯ですか？

デンファレ様——ゲコ」

「ぬかせ、貴様こそ遊んでいるつもりなのか。いつものようにデンで構わんぞ、サルビア」

「それは失礼致しましたデン様。……して、ワタクシの授業は聞いておりましたか？ ゲコ」

「カエルよ、オレ様は腹が減った」

「無視して呼び名を冒頭に戻さないで下さいデン様！　いつまで経ってもエピソードが進みません。ゲコ」

「ええい、貴様の下らぬ授業なぞ片手間で聞いていたとも！　フンッ……献立の話であらう！」

「どうあつても朝食にしたいのですかアナタ様は！　いけません、まだ早朝のノルマが残っております。ゲロン」

「くっ……その語尾も、既にカエルのものではないな」

ちょこざいなカエル面の化け物めがつ、さてはオレ様を飢え死にさせる計略か。この地上を束ねる魔王相手に、何たる無礼だ。側近でなければ極刑に処しておるわ。

崇高たる王座の前にドデンと置かれた黒板を蹴り飛ばす。親父様から受け継いだ絶大なる『魔力』が通じた脚は、遠く離れたレッドカーペットの端まで黒板を吹っ飛ばさせた。ふむ、本日のコンディションも絶好調である。

「とにかく、もう朝の勉学は仕舞いだ！　急ぎ朝食を用意せいつ！」

「……おお……何ということでしょう、これは酷い！　嘆かわしやお勞しや、口惜しや。デン様の父君母君——天国へと旅立たれた“

大”魔王様とイキシア様も、さぞかし悲哀の色を映すことでしょう。愛国の一心で大魔王様に長らく忠義して参りましたこのサルビアですが、身を粉にし死するとも申し開きが出来ませぬ。ああ、不肖で至らぬワタクシをお許しください、大魔王様……ゲコ」

「それは今年に入ってから何回目の決まり文句だ？　お涙頂戴台詞

なんぞ、反復されずとも学習しておるわ」

「……………チッ」

おい、主に向かつて舌打ちしたぞ、この従者。それと、うつつうしい口癖はどうした口癖は。初登場で口調を崩すでない。

「ええええ、分かりました。それでしたら間を取りまして、デン様がワタクシの質問に答えられたのなら朝食に致しましょう。げこ」

「ふふんっ、面白いではないか。いいだろうサルビア、申してみよ」
「げろん、と一呼吸置く人型のアマガエル——厳密には『フロッグン』という種族だったか。着衣だけは大臣という役職に相応しいのが何とも不釣合いだ。」

「はい、それでは浅く広く出題致します。デン様の父君——大魔王様がこの世界を統治なさって、かれこれ十六年が過ぎましたが、人類と我々魔族との関係はどのように変わったのでしょうか？ 簡略して結構ですので、お答え下され。げろ」

「フウアーハッハア！ 勉強一日分のノルマ代わりには随分とヌルイなっ！」

「勝手に一日分にしないで頂きたいです！ ゲロゲロリ」

「ぐぬう、さりげなく騙すのは失敗か……まあいい。有能なオレ様にとって、このような問い掛けなど造作も無い。まさに朝飯前なのだっ！ それにだ、愛しき民の常識ぐらいは心得ておる。親父様の統治……すなわち全種族に対し、『禁忌』を設けたのであるっ」

「その通りで御座いますが、では『禁忌』とはどういった法なのでしょう。ゲッコ」

「おい約束が違うぞサルビアよッ！ 答えれば朝食に言っただろうっ！」

「一問とは申ししておりませんデン様、ゲコゲッコ」

身を乗り出して抗議するも、無為に終わる。

「ぐぬう、謀られた……オレ様の腹ペコを利用した、タチの悪いペテンが行われているぞ！」

「……御託を並べずキビキビ答えて下さいよ」

「ん？ 何か言ったかサルビア。小さすぎて聞き取れなかった」

「いえいえ何でも御座いません。ゲロン」

「頬を膨らませるといふ愛嬌で誤魔化された感が否めないが……ゲ
フン。つまりだな、『禁忌』とは人と魔族を分かつ法なのだ。全十
ヶ条から制定され、争いを無くす絶対規則でもある。分かり易い条
例を挙げるならば、『許可なく領地の外へ出ることを禁ずる』や『
例外なく魔物の討伐を禁ずる』といった感じだな。ウハハハ、どう
だあサルビアよ！」

「いやはや舌を巻きます、今日もデン様は冴えますな。見事な模範
解答です、ゲロゲロ」

「フウアハツハア！ よいぞ、もつと褒めちぎれえ！ 称え敬え賛
美を送るがいい！」

ニヨキツとした八重歯を誇示させるオレ様、カッコイイ。

「いいですねえ、やれば出来る子なんですデン様は。でしたら、
その調子で次の問題へ参りましょうか」

「うぬ？」

ここぞとばかりに、サルビアの目が光る。

「学ぶことは、星の数ほど御座います」

「うぬあー」

頭を抱え、うな垂れるオレ様、カッコワルイ。

日課の退屈とした苦行を乗り越え、悠然と闊歩し向かった先は…
…食堂に他ならない。

キャンドルに灯る炎、頭上にはシャンデリアが煌き、オレ様が物
心つく前に亡くなられたという偉大なる親父様の肖像画が待ち受け
ている。

豪華なディナーテーブルに並べられた陸海空の幸。どれもこれも
一級品ばかりである。フハハツ、高貴なオレ様の腹を唸らせるとは、

中々やるな料理人よ。褒めてつかわずぞ。

「うむ……しかし毎度思うことなのだが、オレ様が食べ残した料理は捨ててしまうのか？」

「ケロロ。まさか、そういった勿体無いことなどしておりません。後でスタッフが美味しく頂きました、で御座います」

スタッフ？ 従者のことだろうか。

「ウァーハツハ！ そうか、ならば良い。食材の無駄遣いかと思うたが、オレ様の杞憂であつたか」

「ええ、左様で御座います、ゲコ。……デン様直々の毒味も終わつてますからね」

「ぬ？ 今日は忍び声が多いなサルビアよ。またしても聞こえんかつたぞ」

「いやはや大したことではありません。どうぞ、お気になさらず、ケロリ。ささ、せつかくの料理が冷めてしまわれます」

「おお、そうであつた。民草の王たるオレ様は、常に健全でなければな！ その為には何よりも食事が大切なのだ」

席へ着き、両手を合わせる。聞けば、これは食に対する感謝の表しだと教わつた。血となり肉となれ、家畜めら。

「いただきます」

パク、モグモグ、ガツガツ、バクバク。

「ケロ。あの……デ、デン様？」

「ぬぐあ？ ムシャムシャ……ごくん。食事中に不躰な。何用だ、サルビア」

「あ、いえ……その、今朝はいつにもまして、食欲が旺盛のようですな。ゲコッ」

「うむ、今しがたの話を聞いて考えが変わつたのだ。これはオレ様の為に作られた料理——で、あれば、オレ様が残さず食べきる事こそが筋であろう。選りすぐりの家畜や野菜も、国の礎となれば本望だと思ふ訳だ」

「ゲコロッ、なんとも立派な考えですが、それでは……」

「なに、心配はいらん。オレ様は育ち盛りだからな、この程度の量など容易く喰らってやるわっ！」

すこぶる好調であるオレ様は、腹の虫を黙らせるかのようにフルコースを丸々と平らげた。控えているサルビア大臣からの視線が怨めしかったのは気のせいなのか。ついでに、カーペットを汚すほど垂れてたヨダレも気のせいなのか。

もの慣れた一人きりの食事は、そこそこに満足であった。

大理石が敷き詰められたホール。オレ様が魔王になってからというもの、華やかなパーティが行われることは滅多にない。あからさまな世辞やダンスは好かん。肥えた富豪を招き入れ社交場を設けるというのも、サルビアが有意義だと勧めているだけで、オレ様にしてみれば大した実になるとも思っておらんし。

ならばと、その無駄に広い空き部屋は、もはやオレ様専用の演習場として片付けられ機能していた。

「食事の後は、やはり運動に限る——なッ！」

見舞う飛び膝蹴り、しかし当たらない。

「フッフ……どうやらデンファレ様は、サルビア大臣殿の学問より実戦の方が性に合っている御様子ですね」

遅しい白豹の足で、オレ様の肘鉄を難なく躲す。

「当然だろう！ 世を統べるは知にあらず。親父様も、そうして動乱の世を戦い抜いたと——聞いたあッ！」

一足に踏み入れた拳は空を切る。おのれ、白蛇の尻尾にすら触れられないではないか。

「おやおや、そうではありません。それは違いますよ、デンファレ様。大魔王様の至言は『世を統べるは“血”にあらず』で御座います。さらに大魔王様は知・力・心、何事におかれましても、ことごとく超越されておりました。先ほどの御言葉を拝借するならば、戦

場では本能の赴くままに鬼神となられ、統治後では混迷した経済をまとめられ、そして我ら配下の者達におかれては……分け隔てなくお優しかった」

「今だ隙あり!!」

「そんな隙など御座いませんよ、フッフ」

背についた白鳥の翼を羽ばたかせ、宙へと脱されては……円を描いた回し蹴りも避けられるのが道理である。

「少なくとも、私が御仕えしてきた大魔王様は、そのような流儀を用いられませんでしたね」

白狼の顔で微笑む『四信』が一人——獣信、ハナズオウ。

オレ様を卑怯者だと遠回しに揶揄するとは……ぐぬぬう、悔しいが言い返せんではないか。

ともあれ……なるほど、流石はオレ様の近衛騎士を名乗るだけはある。まだまだ余裕綽々たる面持ちなのが腹立たしいが。なんとも素早しっこい奴だ。

「それを言うなら貴様もだろう、ズオウよ。そう飛び回られては、組み手にならぬではないか！」

「フッフ、ご冗談を。私がデンファレ様へ教授するは、『魔力のコントロール』に御座います。よもや真つ当な組み手など、今となつては敵いませんよ。御身十六の齢にして至高……ポテンシャルという観点におかれては、四信の誰であつても太刀打ち出来ないでしょう。されど、それだけに未成熟な部分が露呈しやすいのです。まだまだお若いのですから……修練あるのみですよ、デンファレ様。制御が上手いかならないからといって、うさ晴らしで格闘戦を仕掛けるものはありませんよ」

「むう。だが、それでは……つまらんぞ」

「これはこれは、そうふて腐れないで下さい。特訓を開始してかれこれ二週間ほどですか、焦り齒がゆい御気持ちは察しますが……ああ、でしたら御自身の『魔力』で空を飛ばれるというのは如何でしょうか。そうして頂ければ、私としても『魔力』の鍛錬も兼ねられ

て一石二鳥ですしね。ひよっとすると、私に触れることも出来るやもしれませんよ」

羽ばたかせたまま、オレ様を見下ろす獣信。ふんっ、魔王相手に随分と生意気ではないか。

「うーむ……………よし。そこまで言うのであれば、やってみるぞ」
望み通り、業腹な気持ちをバネにし見返してやろう。あつと言わせてやる。

オレ様は、ひらけた演習場の空気を吸い入れた。目を閉じ、闇に委ね集中力を高める手順。

ここからは感覚との駆け引きだ。

『魔力』を行使する為の『魔術』、そして『魔術』の原動力となる『マナ』。それらを理解していなければ、使うことが出来ぬ能力。サルビア曰く、原始を司る“術”は“力”を燃して“法”を創り、界を介する——らしい。

何のことが難しくてよく分からんが、要は蛇口を捻ればいくらでも水が出る。受け止める器も、オレ様の場合は実に雄大である。あとは、その水を……………どう扱うか、それは術者次第ということなのだろう。

親父様から託された、力を。

術式構築、詠唱破棄、『魔力』——導入。

意中で念じた直後、空間の振動を肌で感じた。続いて、唸るような地鳴りが聞こえ始める。

「ッ……………相変わらず、単独とは思えないほど、凄まじい干涉力ですね……………美しい」

高まっていく集中。ズオウが何やらボソボソと喋っているが、耳にまで届くことは無い。

核に渦巻く胎動を御する。

全身を伝う血脈に一本継ぎ足すイメージで——五感を研ぎ澄まし、世界に満ちた『マナ』を練る。それを精巧な魔方陣と組合させ、念じ『魔力』としての形質を定める。然る後に自らの思いのままに操

るのだ。

浮けっ、浮けッ、浮き上がれ！！

——フワリと、踵から大理石の感触が離れていく。

滴り落ちる汗を拭う暇すら緩みになりかねない。一点に注がれた精神のベクトル。

オレ様は、自身がどうなっているのかを問うた。

「どう、だ……ズオウ、よ」

「……やれやれ……恐れ入ります、素晴らしいです、驚嘆に値しますね。こうもあっさりと体得されては、私の立場がありませんよ。天才とは、文字通りデンファレ様の為に作られた言葉なのでしょう」
ウ、ウハハッ、それで、あろう。この魔王に失敗など許されないのだ。

「間違いなく浮かんでおられますよ……3ミリほど」

「オレ様はホバークラフトかつ！！」

戯けがッ、これでは何の役にも立たぬではないか。
地団駄を踏んだ途端、オレ様の靴底が地面に着いた。
あっけなく、清々しいまでに、何の手ごたえもなく。
どこから失笑が聞こえてきそうなほど。

悔しい。

これだけ集中したというのに、たった数秒間のフライト、だと？
楽しくも何ともない。むしろ愉快なほどに不快で不機嫌だ。

虚しくなり、焦りと憤りが湧き上がってくる。

ふざけるな。許されぬぞ。

「お……のれ……おのれ、おのれっ！　このようなことで、こんなことでオレ様は——親父様に近づけるのか！？」

やるせなさを我慢しきれず、不意に口から零れた言葉。

その時、ハナズオウの獣耳が、ピクンと反応した。

「デンファレ様は……もしや、大魔王様のようにになりたいのですか

？」

初めて見た険しい顔つき、細くなる視線。

「……そうだと言ったら、悪いのか」

錯覚だったのか、一瞬曇ったかのように見えた表情は、すぐさま明るくなった。

「いいえ、全知全能に憧れるは雄のサガに御座います。しかしながら……」

地上に舞い降り、ズオウは白虎の指を立てた。あくまでも、丁寧な口調で諭す。

「デンファレ様には、足りないものが一つだけ御座います。大魔王様に有って、デンファレ様には無いモノです。それは幾ら鍛えられても、どれだけ勉強に励まれたとしても、加えて『魔力』を自由自在に使いこなされても……この城で燻られている以上、手にするとは叶わないでしょう」

優しい表情のままに、そう断言した。

ほう……なんとも、癪に障るではないか。

「……それとは何だ、答えるズオウ」

獣らしく、ハナズオウは鋭く尖った牙をさらけ出した。

挑発的でいて、まるで憎むかのように。

「宿敵と書いてライバルと読む——勇者ですよ、デンファレ様」

『サルビア殿に見つかれば何かと厄介なことになりかねません。必ず、お一人で参られて下さい』

そんな忠告を聞き入れ赴いたのは、オレ様の居城——グロリオサ城の天辺に構える、私室のベランダである。

時刻は正午に差し掛かり、このままでは午後の授業が始まってしまふ。何をやっておるのだ、ズオウは。

「お待たせしました、デンファレ様」

軽やかな余裕を感じさせる、清ました声。その熟練した執事を思わせる優雅がな口ぶりは、扉からではなく窓の外から聞こえてきたのであった。自らの翼を上下させ、飛翔する二羽。

「遅かったではないか、ズオウよ」

「申し訳御座いません。なにぶん急でしたので、遣わせる部下を選定するのに手間取っておりましてね」

「では、そやつが？」

「ご推察の通り、デンファレ様を勇者のもとまで送り届け致します

——下級魔鳥、『ビッグクロウリー』です」

「ガア、ガアッ！」

アピールするかのようにさえずる黒鳥。元気があって大変良いが。「うぬう………なんというか、今一つ知性に欠けるな。もっと賢そうな奴は居なかったのか？」

「何しろ至急の手配でしたので、ご容赦を」

頭を垂れる獣信。まあ、時間も限られておるう、選り好みしている場合でもないか。

「いいだろう。今回の目的は“視察”であるからな。今の勇者がオレ様のライバルとして相応しいか、見極めるだけだ」

「ですが本当に……我ら四信をつけなくても宜しいのですか？」

「くどいぞ、ズオウ！ 親父様も、オレ様の歳で革命を掲げ旅立たれたのであろう？ 自慢話を語るように、貴様が何度も繰り返し言うておったではないか」

「おや？ フッフ、そうでしたか。お恥ずかしいですね」

こやつ、本気で照れておる。

「ならば存分に恥じていろ。なに、勇者を一目見たなら戻ってくる。一人きりでは初めての外出とはいえ………このような時に備えて、前々から用意しておったからな」

自慢げに、ほれっと鞆を突き出す。

「……フ、フッフ………旅行気分のリュックサックに、思わず苦笑いです、私」

柴犬のような顔になったズオウ。む、何か間違っていたのだろうかオレ様は。

訝しげに首を傾げていた、そんな時。

コンコンコン、と低い位置から扉を叩く音がした。

「デン様ー？ 鍵を開けて下さい。楽しい楽しい午後の授業で御座います。ゲコ」

っ、まずい、サルビア（うるさい奴）が来た！？ この思惑がバレタのなら縛り付けられてしまう！ 事と次第によれば百叩きもあり得るぞ！？

「ええい、ともかく行く！ 運べ、カラスよッ！」

「息災を祈っております。お気を付けて行つてらっしゃいませ、デシニア様」

「うむ、サルビアへの言い訳は頼んだぞー！」

オレ様は急いでベランダの柵に足を掛ける。と、同時に決じ開けられる扉。やれやれ、間一髪だったか。

「デ、デン様、何をしてらっしゃるでゲロ！？」

制止はもちろん無視。グワンと、勢いよく飛び降りた。

「ウアゝハッハ！ さらばだ、サルビアよ！」

振り返らず、降下しつつも別れを告げる。

「グルアッ、グルアッ！」

「つて——ぬうおわ！？」

てつきり背中に乗るものだと思っていたが、巨大ガラスはオレ様の胴体を驚掴み、そのまま白き雲より高く急上昇した。オレ様は酸欠と怪我をしないよう、腹部と顔に薄い『魔力』の膜を張る。

みるみる遠くへと離れるグロリオサ城。あれだけ広々としていた城が、今や掌に納まりそうなサイズに縮小していた。城下町の家屋など米粒程の大きさだ。

何と言うか、感慨深い。

「……しばしの別れだ、主の居ない城よ」

サルビア大臣、獣信ハナズオウ、心配を掛けるが後を頼む。

まだ見ぬ不安と、未だ見ぬ期待に胸を膨らませ。

意気揚々と鞆を背面に巻きつけて。

さあ、魔王の出立だ！

「……と言う訳でして、『魔術』と相反する『きじゆつ祈術』の始まりも、古文書によればグラNDER神から授けられたとされております。どちらにせよ、なにぶん神代太古の技巧である為、詳しいことは判明しておりませんが——ゲロ。かと言って、『魔術』や『祈術』は今や生活に欠かすことのできないスキルであります。そこはデン様もご承知の通りですな。したがって現在、四信の一人である『あの妖女』を中心として、魔祈術学士都市にて日夜鋭意研究中なのですが、ゲロロ」

「どうして……こう、なったのだ」

空の上での授業は気持ちが良い。マスクのように張った『魔力』のお陰で、吸い込む酸素も事欠かない。何よりも雲の海を泳ぐかのような体感の後世に語り継がせたいほどだ。

それはいい。だが——

「何故貴様がここに居る、サルビアよ！」

「それはこちらの台詞に御座いますぞ、デン様！ もしも、あれ以上遠くへ行かれていたならば、ワタクシの跳躍魔術でも追いつけたかどうか……ゲロ……世界に君臨する長として、自覚はあるのですか！？」

珍しく語気を強めたサルビア。どうやら黒鳥の背中に乗っているらしく、その表情までは窺えないが……真剣な声色はヒシヒシと伝わってきた。

言っていることも、正しいと思う。

……ここは打算せず、素直に折れておこうか。

「す……すまな、かった」

「いいえ、素直に謝っても許しません。罰として授業の続きです！それと、獣信を含めた説教は改めて城で行いますから！ ゲッコ
ゲコ！」

「おかしい！ 罰が二つもあるぞ！？」

「……もう一つ、お望みで？」

翼の上から、ひょっこりと顔を出すサルビア。逆さになった目が怖いぐらい据わっていた。

「いやオレ様の失言であつた続きを頼む」

蛇ならまだしも、カエルが睨むこともあるのだな。また一つ賢く
なつた。

「ケロロオ……このサルビア、デン様の我俣に振り回されるのにも、
ほとほと慣れましたぞ」

短く嘆息を吐き、サルビアは柔らかい物腰へと立ち返る。

なんだか、凄く恥ずかしい気持ちになった。

雲の上を漂うこと半日。何もかもが真新しい——通り過ぎてゆく
数々の大陸に目を奪われ、サルビアの授業など右から左。今は地平
線に沈みゆく半輪を眩く感じている。

「ところでデン様、もうすぐ到着致しますが……これから向かわれ
る町のことは存じ上げておりますかな？ ケロリ」

「ウァーハッハ、無論だ！ 愛しき民衆の市区町村など、とうに把
握しておるわ。たしか……希望が灯る町、ホップであろう」

「おお、左様で御座います。民の事となれば熱心に御座いますな、
デン様は。ホップは町を取り囲むようにして森林が生い茂っており、
ほどよく豊かな材木資源が特徴です。森を伐採して作られた一般道
が他の村とを繋ぐ物流の主になっておりまして、食に関しても必要

最低限では御座いますが滞りありません、ゲロ。さらに申し上げるなら――」

「勇者の故郷である、か」

「まさしく……ケロケロ。こうして我々魔族と人間が共存し生きてゆけるのは、まがりなりにも勇者の存在があったからに御座います。ですので、大魔王様からの遺言の一つとして勇者一同には年度毎に援助金が送られておりますが……しかしワタクシも勇者の“その後”までは知りません。果たして、どうなっていることやら」

「フンツ、そんなことは決まっている。オレ様の予想では、勇者は反逆の時を静かに待ち、自らの剣を研いでいることだろう。ククク……フウアーハツハアツ、実に楽しみだな！」

「どこがですか！ それはつまり、魔王様を倒しえる力やもしれないのですよ？ ゲロ」

「フハハツ、ますます良いではないか！」オレ様は指をパキポキと鳴らして応える。「ようやくだ！ 待ちに待ちかねた時がやってくる。貴様やズオウ、それに他の四信から親父様の話を聞かされるたび、心中では血湧き肉躍っておったのだ！」

おとぎ話のような伝説の一端。総決戦に次ぐ煙火の死闘。空に溶ける開戦の号砲。血で血を洗う死屍累々。そんな手の届くはずも無い空想絵巻に、自らがにじり寄る実感。

「さながら悠久の戦慄を覚えるようではないか！」

これほど喜ばしいことなど、そうはない。

「ああ、そうだとも！ 魔族の遺伝子が疼くかのように、胸の奥底が呻き煮え狂うが如く、押し殺せぬ衝動が溢れてくる……ッ！」

「ま………魔王、様？」

その衝動は――狂喜、破壊、粉碎、消滅、悲涙。

どれでもない、近くて遠い。

筆舌に尽くし難い、ナニ力。

求め、願い、盛り、疼き、焦れ、乞い、欲し、渴き、望んでいる

ような――

「デンファレ様、デン様ッ!!」

「――はっ」

堕ちそうだった意識が戻る。

オレ様は、何を呆けていたのだろうか。

……っ……思い出せぬ。

「町が、見えて……参りましたよ? ゲロ」

「う、うむ。言われずとも分かっているわカエルめ」

頭を振って意識を切り替える。

雲の合間から見える小さき町、あれがホップか。まあ……見た目は普通の地味めな田舎町だな。若干とはいえ期待して分、拍子抜けとさえ思える。

村の半分を占める田畑、牧歌的な木造の家々、出店の商店。オレ様のグロリオサ城と比べるまでもなく、随分と貧困そうな町だ。

親父様と相対した勇者の故郷、か。今となつては『希望が灯る町』というのも名ばかりだが……興味が無いと言えば、嘘になるう。

「よし! では巨大ガラスよ、町へ寄り中腹辺りで降ろ――」

「グガアッ! ガアッ!!」

ガクンと、いきなり、支えを失った。

何だ、どうした。

思考することが出来ない。理解不能だ。頭を働かせるも、今一つ認知の対処が追いつかん。

っ……いや、そうか、この感じは。

かぎ爪が、胴から離れたのだ。

大の字になったまま、オレ様は重力に従う。

強風が押し返すように逆らうが、関係なく緑の地表が迫り来る。

高度は高いから高度なのだ。いかん、訳が分からん。

……とりあえず、胡坐あぐらを組んでみた。

「ケロロッッ、何を悠長に構えているのですか、デン様!」

一緒になつて落下してきた大臣。身をよじつて、空中平泳ぎをしながらオレ様に近づいてくる。その様はカエルそのものだった。

「落ちて着けサルビアよ。こういう時はパニックになつたらいかんぜよ」

「落ち着くのはデン様です、ゲロツ！　　というか慌てて下され！
お、落ちているのですよ、ワタクシ達は！」

そうであつた。考える、考えるのだオレ様よ。

「な、ならば、貴様の得意な跳躍魔術とやらはどうだ？」

「ケロツ！　足場が在りませんのに、どうやって跳べと仰るのですか！？　というより、跳んで、いかなされるのです！」

「むう、むう……本格的にヤヴァイな、これは」

オレ様の『魔力』で脚部を纏つたとして、果たして二人分の落下荷重に耐え切れるのだろうか。

頭を回転させること数秒。

……十中八九、無茶無理無謀だな。運よく一命を取り留めたとしても、骨が折れるだけでは済むまい。

だとすると、かなり危険な賭けだが……しかし、アレをやるしかないだろう。疲れるのは好きではないが、助かる為には止むを得ない。まい。

ガシッと、サルビアを放さぬよう捕まえる。こういう時は小さく両腕に収まるサイズなので有り難い。

「掴まっている」

「ケロ……デン、様？」

「オレ様は魔王、オレ様は魔王、オレ様は魔王、オレ様は魔王——」

「トトト、トランス状態に入っておられるでゲロオオオオオ！？」

オレ様は偉大なる大魔王の子息なのだ、やってやれぬことなど有りはしないッ！

「すう……はあ……」

誇りを示せ！　気位を表せ！　品格を見せろ！　何でもいい、自意識過剰になりきるのだ！

「術式、構築……詠唱、開始」

目を瞑り、より正確に、さらに強く、脳髓まで刻み込まれた複雑怪奇な方陣を構想する。

騒がしい旋風など物とせず。幾ばくかの猶予など忘れてしまえ。

「魔道の極地にて深遠なる大我よ。己を導くは魂の在処ありかと知れ」

オレ様の有する魔術など、これ一つしか知らないのだから。

「炯々《けいけい》にして跋扈ばっこ、原初の負を解して理を得るならば、個を賭して然を掴むべし」

方陣と言霊が、頭の中で合致した。

「『魔力』——導入」

ああ、そうだとも。

3ミリも数センチも、大した差など無いだろう！

親父様の万分の一でいい……力を貸せ、オレ様に流れる血よッ！

「浮ッけええええええええい！！」

その光景は、異様の一言だった。

おびただしい『魔力』に干渉され、樹林全体が波立つ。

サルビアの絶叫が轟く上空からの、垂直落下。

風とは違うエネルギーが、一人と一匹を失速させている。

夕刻から宵闇へ。

茜空と太陽に別れを告げ——樹木、無数の枝に出会う。

ズドンッ！！

オレ様達は、ほの暗い大地へと降り立った。

第一話 表：弱虫な勇者 裏：オレ様な魔王（後書き）

初めましての方は初めまして。作者の進士夜 紳士です。

ここまで読んで頂き、誠に有難う御座います。

まだ一話なのに……長すぎる。

そう思われる方も居られるでしょうが、私もそう思います。

どうして、こうなった。

二話目からは細分化してお送り出来たら……いいなあ。

キーワードの通り、不定期で更新していく予定です、温かい目で見て頂けると幸いです。

ここで突然ですが、イラストコーナー！

できる限り、登場人物をイラスト化していきたいと思います。

今回は冒頭で戦っている大魔王と元勇者をシャーペンで書いてみました。お目汚しでなければ、見てやって下さい。

> i 2 7 9 5 5 — 1 9 9 1 <

次回は主人公であるデンファレとポリジのイラストを載せる予定です。

第二話 表：勇者の素質 裏：魔王の片鱗（前書き）

●二話の登場人物

????：ナレーシヨン

ポリジ：弱虫

シュロ：いじめっ子

デンファレ：二代目魔王

サルビア：魔王に仕える大臣

ビッグクロウリー：下級魔鳥

第二話 表：勇者の素質 裏：魔王の片鱗

「……チツ、あゝあ……だりい」

アイツを送り出してからというものの、かれこれ三十分ぐらい経った気がする。うんざりと舌打ちして、俺は近くの切り株に腰を落착かせ足を組んだ。

外暗えし、正直もう町に帰って遊びてえ。ったくよあ、誘つてなんだけど、なんでアイツは何日も何日も、毎日アホみたいに探してんのに飽きねえんだ。どうせ見つかる訳ねえのによ。つーかさ、普通こんだけ探してたら嫌気とか差してくんだろ。なんだおい、根気が快感になるとか、そんな類なんですかってんだコノヤロウ。

とんだ変わり者に声掛けちまつもんだぜ、今更だが。

「こんなところで、なゝにしてんだかなあ……俺は」

ぼやいちまうほど退屈だ。明日の予定とか考えんのも、そろそろ限界だし。やることがないので、俺はアイツが入っていった森を見た。そこは星明かりが無くて、底の見えない穴ん中みたいだった。

「大体ペンダントだなんて、ある訳ねえじゃん」

嘘だよ、嘘。笑えねー洒落に決まってるだろ、そんなの。さつさと気づけよ全く鈍感が。

だー、ムシヤクシヤする。ただ俺は『アイツが勇者じゃない』ってことだけを証明したいのに、どうしてこும்上手くいかねえんだチクシヨウめ。もうアイツのことは置き去りにして、このまま帰っちまうか、あん？ っていうかだ、毎回汗だらけの泥だらけになってまで他人の持ち物探したりするか？ しかも無償で。いや、ねえ。あり得ねえ。具合の良いタイミングで『ごめんねー、一生懸命探したんだけど、見つからなかったー』で済ますだろ。つーか俺だつたら探しもしねえよ御覧の通り。絶対まともじゃねーよ、気持ち悪いーよ。勇者の息子じゃなくて、実は変態なんじゃねえのかアイツは。いつの間にか、組んでいた足は解け、止まらなくなっていた貧乏

揺すりに苛立ちを募る。

アイツが痛みとか感じねーでヘラヘラ笑ってる奴だけってんなら、ここまで熱くはならなかった。『周りから虐められんのは慣れてます』って清まし面で暮らしてんなら、こんなにム力つくこともなかったんだ。今までと同じ、町の連中みたく絡まず無視し続けたか、二・三こと適当に話して『はーん、やっぱりな』って感じで納得するだけだったんだよ。

どっかで小汚ねえボコを出すんじゃないかって、心ん隅っこで期待してた。理不尽なことばっか言ってるや、その内キレて本性だすんじゃないかって思ってたんだ。

だけどアイツ——普通に泣くじゃん。悲しい表情、出来んじゃないよ。話し掛けただけで嬉しそうな顔、してくんじゃないか。

これじゃあ聞いてた話と違う。噂なんて他人の陰口、実際は当てにならねえとは思っていたが、それでも下種が過ぎるってのは良く分かった。

関るな、喋るな、目を合わせるな、考えるな、繋がるうとするな。呪われる、祟りが起こる、不運に巻き込まれる、災いが訪れる、誰も彼もに嫌われる。

てか“忌み子”って何だよ、一昔前の用語なんざ使いやがって。いまだき流行らねえんだよ、そういうのは。ダセエ、ふざけんな。虚弱体質、貧相な身なりしたバカ、ジメジメしてる、なんか全体的に影薄い。学校の成績は……ま、まあ俺以上だけだよお、そんなも並の平均。どう考えても凡人以下の人間だ。いや、若干変態っぽくて気味悪いけどさ。

それでも、アイツは怖くねえ。つーか逆に、こっちがビビらせてやるぐらいだ。どこも特別ななんかじゃない。ちよつと変わってるだけで、可もなく不可もない真正のヘタレ野郎だよ。断言しといてやる。

そんな奴を……よってたかってボコしてよお。いかにもな鬱憤晴らしで気持ち良さそうに。チッ、こんなんだから町の連中には『何

やってんだよテメエら」って言いたくもなっちまうんだろうが。

情けねえのは、どいつだ。

弱え奴は、誰だ。

あんなのに根負けしたのは……っ、ああいや、そりゃ俺の方が。

あー、イライラする。こんな田んぼと森しかねえ田舎町、さつさと出てえ。学校卒業すんの待ってるよ、あの凶暴クソオヤジが。熊みてえな図体しやがって、いつか狩猟すんぞコノヤロウ。

ついに耐え切れなくなっ立ち上がった俺は、初めてアイツのこを待たず帰ろうとした。

もういい、負けでいい。明日からは誘わねーよ。どうせ、あと少ししたら俯きながら戻ってくんだろ。ざまあみやがれ、追い討ちで置いてけぼりも味わいやがれてんだ。

「だから、今日だけは困って泣いとけや、ポリジ」

はんっ、負け犬の遠吠えだよ。なんか文句あつか、あん？

そんな誰にも向けてねえイチャモンで区切りをつけて、俺が迷いの森を後にしようと背を向けた、その時だった。

ズドン——と、まるで大砲ぶちかましたみてえなデケエ音が鳴り響いて。

「な、なんだあ、今のは……？」

そして、余韻で痺れた体が治まったかと思いきや。

『う、ひう、ううわあああああああ！！』

そんなザコ丸出しな悲鳴が、俺の耳元にまで届いた。

振り返った俺は、動けなくなる。

視界に広がる迷いの森は、ただ在るだけで。

さつき聞こえた声の正体を教えてくれる奴は一人として居ない。

雑然とした森と、不気味なまでに穏やかな風。得られる情報量は、それだけだ。

「んだ……幻聴、か？」

そう思いたくもなる。そう思わずにはいられない。奇妙な勘が働く。あやふやな想像が諭す。迷妄に拍車が掛かる。

もしペンダントを見つけたんなら大声で呼べと言ったが、俺が頼んだのは、こんな合図の仕方じゃなかった。

あれは驚いた声だ。もしくは脅えた声だった。

悲鳴？ 勘違いだ、そういう日もある。曖昧だ、いくら何でも唐突過ぎる、そうだろ。

でも、じゃあ、隕石でも降ってきたみてえな地響きは、何だ？

一歩下がる。

だけど、もしも、あれが本当に助けを求めていたのなら、どうする？

二歩下がる。

必ずしも安全って訳じゃない森だ、ここんどこ滅多に見ねえが、魔物だつてことも言い切れないんだぞ。

「……いや……いやいやいや、ねえだろ。行かねえだろ、どう考えても」

歪な薄笑いを浮かべて後ずさる。

じよ、冗談じゃねえよ、バカかテメエは。お、俺の聞き間違えに決まってるだろうが、そんなん。

関係ねえ、関係ねえぞ、俺には関係ねえんだ。貸しもねえし義理もねえ、見ず知らずの奴なんかの為に命張れるかってんだコノヤロウ。

瞬きを繰り返す。

やつ、そうだよ。ほら、そもそもアイツって“勇者の息子”なんだし、俺なんか行かなくなっただって、どうとでも――

『誰……かつ、助け、シュロ……くん！』

溺れた子供が、もがきながら叫ぶような、うわずった声が鼓膜を叩く。

森の奥から発せられた、途切れ途切れに吐かれた言葉。

追われている。襲われている。

空耳とか思ってたのが全部、吹っ飛んだ。肺が凍ったみたいに冷たくなって、手が震えてきやがる。

「っそ、マジか——よおっ」

泣きそうっつーか、半分泣いてた。心ん中じゃ大雨洪水注意なほどこに号泣だ。嫌がらせとしか思えねえぞ。

ポケットの中をまさぐる、なんも出てこねえ。足元に放っていた鞆を開けたが、筆記用具と教科書だけしか入ってねえ。身につけてんのは布の服に革のベルト。こんだけあさって武器になりそうなのは素手だけときたもんだ。装備って言えんのか？　こんなん。

体一つ、命一つ。替えが利かない、分かってんだ、そんなこと。自分の命は、自分で守らなくちゃいけないって習ったことがある。

どうしても行かなきゃなんねえのか、他に誰か居ねえのか、俺じやなくてもいいんじゃないか、町まで引き返してオヤジとか呼んできた方が。

だが間に合わなかったら、アイツは？

「あ、う」

息が詰まる。呼吸がし難い。

なら逃げろ、わき目も振らず走れ、とにかく逃げちまえ。何も見なかった、何も聞かなかったことにして、それで明日も学校行つて、面倒な授業とか軽く聞き流して、ボロっつい家帰つて、そうだ久しぶりに仕事でも手伝つてさ、下手こいてオヤジにどやされて、飯食って寝る。

何事も無かったかのように。何事も起こらなかったみたいに。

一切合切関らず、直隠しに目を背け、誰にも喋らずに、アイツのことは考えないまま、繋がりうとしなければ——

ああ、なんだ。この、腑抜けは。

ダセエ男の、出来上がりだろ。

「だーもー……んの、バッカヤロウが!!」

あれこれ悩んでた頭が絞られていく。いつそ真っ白に染まって丁度いいや。

ったく、気安く短気の奴を煽ってくれんじゃねえよ。

ウル目になるまで小突いてやるから覚悟しやがれってんだ、ポリジツ！

俺は、駆けた。

……あつあ……居るよね居るよねえ、こういう昔馴染の番長みたいな人間はさ。^{キャラ}濡れた子犬にそつと傘を差し出す、斜に構えた思春期真つ盛りの純情青年。孤独だからこそ同類を求めて彷徨っちゃう。自己嫌悪にも似たシンパシー感じちゃったりして。自分でもよく分からない、気まぐれで手を伸ばす。こんな俺ってカッチョイーみたいな、お・と・し・ご・ろ。うひょーッ、ハズカシー！ ずぶ濡れになって帰ることが誇らしい、みたいな顔しないでー！ どうせ俺なんか——なんて自問自答で深層心理に語り掛けるのはヤメテー！ お母さあん、胸の中がグルグルするよう、おまけに頭もクルクルだア。もう転げ回るほど悶えさせんといてえ！

まあ、ボクちゃんが転げ回る床なんか無いんだけれどね。あ、親も居ないんだった。

はいさー！ ほんじゃあ今回もノリノリのアゲアゲでお送りするぜい、勇者の為の魔王軍——第二話！

んん？ というか、そういえば勇者って何です？ 魔王って何ぞえ？

……なになに……ふんふん、『モンスターをバツバツと薙ぎ倒しながら進み、なんやかんやで最終的には魔王と戦う者』が勇者それで？ はー……『邪悪なる物の頂点、怪物や魔族を束ねる者』

が魔王、と。

へえー、勉強になった。教えてくれて感謝ッ、為になりました、どうおもサンキューです！

勇気ある者に、魔の王様。つまりシリアルキラーにロイヤルオーソリティってことね、なるほどお。

でさ、それって、面白いの？

……にゃ……そつか、そうなんだ。やばい、形容できない、かなり面白い、と。

ありやりゃ、それは残念。じゃあ、ちょっと合わないかもね、この物語は。

だって、そうでしょう？ 第一話を見て御覧なさいよ。これって“魔王が勇者に挑んだ”お話ですもの。

人々から愛され、一心の憧憬と期待を受け、正しさの権化たる最強な勇者様じゃなく、“魔王が勝ってしまった”世界なんだから。

そして何よりね……“勇者を魔王が導く”ストーリーにもなってるんだよ？

これじゃあ駄目だ。

とても一般受けしないよ。

皆からツマラナイって言われちゃう。

精々、暇潰しがいいところだね。

だからさあ……ボクちゃんは潰すことにするよ、暇を。

これ以上なく押し付けて、力いっぱいに精魂込めて、容赦をなくして飽きるまで、楽しみながら、愉しみながら、狂おしいほど艶やかに、床に穴が開くまで徹底的に。

ああ、そうだった。

床、無いんだっけ。

イッケネー、こいつあうっかりさんだぜハイヨーッ！ さてつと、ぼちぼち雑談もこの辺で終わりにして、お待ちかねの本編に移って、いこうぜヨロシクちゃーん。

んじゃ、そんな感じで、レッツラゴー！



驚いた拍子に尻餅についてなかったら、ひよつとして僕は死んでいたのかもしれない。

高速で僕の頭上を掠めた鋼鉄の口ばし——それが当たらなかったことは、運がいいことになるのかな。

咄嗟に目を閉じてしまったから、空ぶつた後のことまでは分からないけれど。

何かが碎けている、そう認識したのは真後ろから重たい音が聞こえたからで。

土に触れているはずの手が感触を無くすくらい、僕の心を恐怖が支配している。

怖い、もう止めて。嫌……だ。殺され、死にたく、ない。

僕は強張りながらも瞼を開けて、巨大ガラスの全身を目の当たりにした。

黒光りした野鳥の体。頑強そうな胸郭。前傾とした姿勢。前部に二本、後部に一本の“三本足”で、三つに広がった鉤爪。たたまれしていない、今にも羽ばたきかねない翼。

こうやって座り込んだままじゃ、首から下しか分からない。

だから僕は、おもむろに上を見た。

そして、その鋭く尖った先端が、僕の後ろにあった木を突いていたことを知る。

違う、そうじゃない、貫いていたんだ。

長い銀色の口ばしが、ぶ厚い幹を貫通していた。

鋼鉄と木、強度の差異は直に感じた通り。

こんな動物、こんな鳥、僕は見たことがない。

僕の知ってるカラスとは、かけ離れてる。

所々が似ているけれど、何かが違う生き物だ。所々が似ているだけで、全く異なる生物だ。

根本的に。似て非なる形。別の生命体。

僕の知ってるカラスは、もっと小さくて、もっと大人しくて、もっと、もっと。

……なら、うん、そうか。

それじゃあ、きつと、動物じゃないんだ。そうだよ、授業で聞いたことがある。きつと先生は僕に対しては言っていなかったんだろうけれど、勝手に聞こえていたことがある。紛いなりにも、教わったことだ。

そう、だから。

動物じゃないのなら——魔物だ。

魔物の中の、魔鳥だ。

「……う、い……は……や」

見開かれる僕の眼。言葉にならない。まるでパンでも丸呑みした時みたいに、喉のところで堰き止められている。苦しい。何かを喋ろうとしたんだけど、単語に変換することが出来ない。思ったことが、端っこの方から消えていつちゃう。意識を保っていられない。薄くなっていく、淡く透明に、儚く浅く溶けている。気を失いたくはない。だから叫んじゃおう、思いっきり。それぐらい、今の僕にだって出来るよね？

はい、せーの。

「う、ひう、ううわあああああああ！！」

何年かぶりに出した大声によって、恐怖心に縛られていた硬直が解けた。

がむしゃらに這いずって遠ざかろうとしたけど、思うように進まない。土まみれ、泥まみれになっていく二の腕と膝小僧。

逃げなくちゃ……じゃなきゃ、僕も“あんな風に”なってしまう。

既に振り返る余裕は失われていた。考え把握する余地も無かった。未だ光り続ける懐中電灯を握り締めて、四つん這いのまま、ひたすらに前へと手足をバタつかせる。

そんな中、大木から引き抜かれる音が聞こえてきて、決壊寸前の僕を急かした。また僕の心が乱される。

遅い。こんなんじゃ、すぐに追いつかれる。僕は掌について立ち上がった。そのまま走って、盛大に転んだ。つま先が、出っ張った根っこか何かに当たってしまったらしい。足元なんて照らしてなかったから、よく分からなかった。痛い、痛いよ。でも我慢だ。勢い余って胸と顎を打ちつけたけど、それどころじゃない。気にするぐらいなら、忘れなきゃ。

雑多な草を踏み付けている気配。来てる、迫ってきている。

再び身体を起こして、僕は逃げ回った。四方八方に、あの巨大ガラスが追いかけて来なくなるまで、木々の合間を縫って逃げ惑った。同じような景色が、ぐるぐる回る。目まぐるしいはずなのに変わらない情景。

「げほ、はっ、は、はあ……はあ……」

足を止めたのは、単に僕の息が続かなくなったのと、重量感のある沈み込むような足音が消えていたから。

だけど多分そこで、一緒になって足を止めちゃいけなかったんだと思う。

息が絶えても、心臓が破裂しそうになっても、止まるべきじゃなかった。

ガサガサと、葉が擦れる。バサバサと、風を切って現れる。

それは真上からだった。

「——ひ」

せつかく呼吸を整えていたのに、邪魔をされた。

なにするんだよ、やめてよ。

「ガアア、ガアッ！」

立ちほだかる黒。目に入ったそれによって、僕の逃走は遮られた。

「う……う……」

その大きな翼を、忘れてはいなかったんだと思う。どこかで、向こうもフェアでいてくれる気がしていたんだ。

そんな訳、ないのにね。

生きるか死ぬかに、そんなルール、ないのにね。

値踏みをするかのように、僕は巨大ガラスの瞳に射抜かれた。戦意なんて初めから無かったけど、それでも僕は逃げることを放棄した。

逃げ切れない。やられる。僕一人だけじゃ、敵わない。

「誰…… かつ、助け、シュロ…… くん！」

思い浮かべたのは、一人きりで。町の皆でも、お爺ちゃんでも、昔は“勇者だった”お父さんでもなく、それは最近になって話し始めたばかりのシュロくんだった。

どう、して……？

分からない。

近くに居て、助けてくれそうだったから？ 僕なんか、話し掛けてくれたから？ 初めて友達になれると、そう思っていたから？ どうなんだろう。

というか、何で呼んじやったの？

「あ…… あっ、ああ……！」

後悔をするのは、いつだって遅いんだ。

僕は、巻き込もうとした。

何の関係も無い、シュロくんのことを。

臆病だから。どうしようもない弱虫だから。

元勇者の、子供だから。

僕が勇者なんかじゃ…… ないから。

役立たずで失格の、最低の人間だ。

でも、祈るくらいなら出来る。

どうか、お願いします。神様、グランドー様。もしあなたが、この世に居られるというのなら。今の叫び声を、シュロくんには届けないで下さい。何でも、しますから。僕がシュロくんの代わりに、なりますから。

巨大ガラスから目が離せない、足が竦んで動けない。

もう駄目だ。

死んだように動かない四肢。死んだように寒くなる心。死。

お母さんみたいに、冷たく。清める為に教会で焼かれ、魂は『マナ』に還って、人の体は土の中へ。

循環。生まれ変わる。世界の一部になって、世界の欠片になって。それは一体、どんな感じなんだろう？

僕は、僕は――

「ぼさつと突っ立ってんな、バツカヤロオ!!」

怒号と共に飛んできたタツクルで、僕は横っ面へと倒された。

俊敏な口ばしが、またしても幹を抉る。でも今度は、さっきよりも厚みのある木に突き刺さり、食い込んで外れないようだった。

「シュロ……くん？」

目を疑う。信じられない。どういうこと？

僕に覆い被さっていたのは、森の入り口に居るはずのシュロくんだった。

「っ……ざけるな、ふざけんなよ!」

僕よりも大柄な体が震えている。その両手が、強く僕の顔を掴んだ。親指の爪が頬に刺さって痛む。

だけど、それよりも痛々しかったのは、僕のことを複雑そうに睨みつけるシュロくんの表情だった。

「何してんだよ、人のこと呼んどうして何だって諦めてんだよ! ああそうかい。テメエがくたばって野垂れ死にしようが、こっちは知

ったこつちゃねえんだ。死にたきや勝手に死んできやがれてんだ
コノヤロウ。だけどなあ……この俺を、後味悪くさせんじゃねえよ
ッ！ 清々しい目覚めがブチ壊しになんだろぅが、あん！？」

至近距離で無茶苦茶な文句を浴びせられた。頑張つて考えようとして、理解できそうにない。

でも——何故か思いが溢れてきて、心に行き場が無くなって、目頭がジンワリ熱くなつて、僕は謝りたくなつた。

怒られたんだから、きつと僕が悪いんだ。

「ごめつ……ごめ、ん」

「許すかボケが、おら立て立て立てっ！ そんで走れ、こつから逃げんぞ！」

グイツと腕を引つ張られて、僕達は走り出す。

怖くて怖くて堪らないはずなのに……無理矢理に引つ張られた僕は、少し笑っていた。



思えば十年ぶりに立ったことになるのか、この大地に。

レンガや石畳といった人工物ではない柔い感触、鼻につく土壌の臭い——懐かしい、というのも可笑しな話だろぅが。

やはり外は、面白い。

「ぬふう……無事か、サルビアよ」

胴体にしがみ付いていたサルビアをひっぺ剥がし、抱え下ろしてやる。

ふらふらと地に着いたカエルは放心していた。

「ええ……はい。ありがとう、御座いますデン様。なんとか無事、のようです。生きた心地は……しませんでした、ゲロ」

「ならば生きならがにして夢見心地を味わえたのだな。ウアゝハッ

ハ、オレ様に感謝せい！」

質実剛健であることを確かめる為、オレ様は勝利のスクワットを披露した。

それにしても、なんという凄まじい衝撃であろうか。地面にクレ―ターが出来ているではないか。

周辺の地形は何層もの空気の壁に阻まれ、上から押し付けられた風圧によって円形状に消散されていた。木は根元から薙ぎ倒され、雑草は散り散りになり、土は波紋のように凹んでいる。

これよ、これこそがオレ様の實力だ。どうだハナズオウにサルビアよ、褒め称えろ、存分に見直すが良い。フツ……フッフ、フウアハツハア！ すこぶる満足だ、感無量であるぞお？ ほれほれ、スクワットに磨きが掛かるではないか！

「ケロロ、何を悦に浸っているのです、デン様は！ この状況、この事態を、理解しておられるのですか！？」

「うぬ？」

小うるさい両生類め。オレ様の愉楽に水をさしおって。だがしかし、状況……はて、事態とな。そこまで取り乱すことなのか？ 何時いかなる時でさえ、どつしりと構えるのが魔王としての務めであるように。

それ故、オレ様はスクワットを止め、簡潔だが明瞭でない返しをした。

「さあ、分かんが」

「ケーロオ！ このままではワタクシ達、グロリオサ城に帰れなくなっしまいますぞ」

「なんと！？ あのガラス、ビッグクロウリーとやらはどうしたのだ！」

「お忘れですか、冷静さを取り戻してくださいませデン様、ゲロ。我々は、そこから落ちたのですぞ。運良くデン様のお力添えによって事なきを得ましたが、しかし――」

「ええい、そんな事後の解説なぞ要らん。なんとかしろ！」

「そのつもり……で、御座います、ケロンツ！」

言うが早い、サルビアはカエルの足を折りたたみ、跳躍魔術を行使した。遙か上空まで一気に跳ね上がり、姿が見えなくなる。なるほど、こういう時には便利な魔術だ。後でオレ様にも教える、羨ましいぞ。

暫くして、サルビアは大樹の枝を飛び降りながら、オレ様の傍らへと着地した。

「どうだった!？」

「空には居りませんでした」

「ダ、ダメではないかッ! か、かえ、帰れないではないかあ！」

「泣きそうにならないで下さい、デン様! 民に示しがつきませんケロ。この短時間です、空に飛んでいなければ我々と同じく地上へと降りたでしょう。少々お待ち下され。今から暗視魔術を施し致します」

何でもありか、魔術というのは———そうに考えそうになった頭を振る。オレ様はサルビアから受けた責め苦のような授業により、魔術という概念が万能を叶える利器でないことを理解しているのだ。内方した『マナ』を放出する、その難しさを。外方なる『マナ』を御する、その悩ましい道程を。許容以上の『マナ』を取り込み、消耗した際の危うさが、どれほどのものか。

「暗影を払え、その眼に光明を指し示せ——ケロ」

果ては入り組んだ術式を細部に至るまで記憶し、想起させる苦行を。詠唱により凝り固めた想像を、具現化せしめる技量の巧みを嫌というほど心得ている。

「祖は夜を生き、闇を活かす者——ゲコ」

「いちいち語尾で台無しにするのだな、貴様は……」

「方今に宿れ、暗視の瞳孔ツ——ゲコオ！」

サルビアの手から放たれた青白い輝きがオレ様の目を包む。堪らず瞬きをした途端、そこには昼間と同じく色鮮やかな光景が広がっていた。

遙か空から見下ろすのとは、こつも違うのか。

美しいと、そう言わざるを得ない。感嘆の息を漏らさずにはいられない。これは長い間、窓の内側から焦がれていた景色だ。おそらくはこうなのだと、イメージを膨らませていた景觀でもある。

闇に覆われ、口を噤まれ連れ去られた幼き頃とは、雲泥の差だ。

濃緑たる森のざわめき、どこまでも吹き抜ける涼風。

自由——そう、自由だ。得も言われぬ開放感がある。妨げる壁など無い地表、余す所なく楽しみ尽してやろう。

うむ、いい、いいぞ。つまらない悩みなぞ消し飛んだわ。この漲る激情、どうしてくれようかつ。

「フ……フフフ……フハッ、フハハ、ウァーハッハッハ！ 魔王、降臨である……ッ！」

「いえ、ですからそういった茶々は後回しにしてください、時間が惜しいでゲコ。早くビッグクロウリーを探しますよ、デン様」

「ぐぬぬう、ノリの分からぬ奴め」

「……ノリだけで生きられたら苦勞は感じないでしょうね、やれやれ」

「む、何か言ったか？」

「いえいえ何でも御座いませんよ、ケロン！ さあグズグズはしていられません、行きましようデン様」

「仕切るな大臣、何様だ。陣頭指揮はオレ様の役目だろうが。げぶん………では行くぞ、ついて参れ！」

泰然と先頭を歩くオレ様、カッコイイ。

「ケコ。陣頭指揮と言いますか、この場にはワタクシとデン様の二人しか居ないんですけどね」

「う、うるさいぞ、恥ずかしいからバラすでないわ！」

規模の小ささを指摘されるオレ様、カッコワルイ。

これで一定の照度が確保できたとはいえ、あくまでも抜本的な解決の糸口に過ぎない。その場しのぎで歩き出したオレ様とサルビアだったが、現状では探すことが可能になったというだけで、あの黒鳥を見つけられた訳ではない。上空から見た森の土地面積を鑑みるに、まともな搜索などはしていられないだろう。実物を目にしたこととはないが、おおかた砂漠とやらでオアシスを発見するようなものに違いない。

という訳で――

「どうにかせい、サルビアもん」

「ゲコツ、最後の二文字を付け加えるだけで便利な道具が出てくると思ったら大間違いですぞ、デン様。そういった他力本願は荒れ狂う社会では通じないのです」

「だからと言って地道な探索を続ける気にもなるまい。悪くなる一方ではないか、このままでは。なにか打開させる手立てはないのか？」

「ないことも……ありませんが、ケロ」

言い辛そうに目を伏せるサルビア。このオレ様に隠し事とはな、ちよこざいな輩め。

「フンッ、どうにも煮え切らん。出し惜しみをしている時ではないだろう。やるならやるで行動せねば、本当に帰れなくなってしまうぞ」

「いえ、分かつてはいるのですデン様。ですが、それは『万が一』の緊急措置で御座います故、このような些事では使えませんゲコ。というか、そうされることはデン様も望まれないと思いますが」

「いいから申せ、その緊急措置とやらを。判断はオレ様が下す」

「ケロロ……まあ、そこまで仰られるのであれば……」

サルビアが重く結んでいた口を開きかけた、まさにその瞬間を見計らったかのように――

『う、ひう、ううわあああああああ！！』

見るからに、というか聞くからに弱々しい喚き声が上がった。
オレ様とサルビアはキョトンとした互いの顔を見合わせ、無言のままに頷く。

今の良く通る声の人が魔物のものかは分らないが、悲鳴であることは明白だ。そう距離も遠くはないだろう。

サルビアの緊急措置というのも気にはなるが、これ程の手掛かりなどあるはずもない。くだらぬ追求をしている間にも動かなければ、せつかくの好機を逸してしまいかねん。ならば向かうしかないだろう。棚ぼたで黒鳥と相まみえることが出来れば尚良しである。

しかし見つけた途端、彼奴に飛ばれても適わん。幸いにして、オレ様達には暗視の魔術が施されているのだから、物音をたてずに忍び寄らなければなるまいて。

森の茂み、根株を慎重に避け、徐々にはあるが近づいていく。

『ガアア、ガアッ！』

「……ケロケロ。なんたる僥倖。どうやら当たり、で御座いますね」
サルビアの小声に応え、首を縦に振る。黒鳥の鳴き声は、あの草むらを抜けた先か。

「ぬ……誰か、居るぞ」

尖兵さながらに身を潜め、こつそりと草むらから覗き込む。

そこには魔鳥、ビッグクロウリーと相對する一人の少年が居た。
泥だらけの薄汚れた金髪。頼りなさそうな蒼い瞳。貧しいのか、ペラペラの布地を着用している。

「ケロ、ビッグクロウリーは懷中電灯の光に反応したようですね。
と言いますか、あの少年は、襲われて……いるのでしょうか」

「それにしては抵抗している素振りが無いな。人間とは、こういうもののなか？」

「げこげこ。いえ、本来ならば我々に対しては逃げる立場で御座いましょう。今では『禁忌』も制定されていますし。ましてや人間の

子供であれば、尚更です」

「では、なんだ、その、錯乱しておるのか？ あやつは」

「どうでしょうね？ 怖気づき動けないのか、それとも。いずれにせよ、ケロ、このままでは喰われてしまいますな」

「っ、あのカラスは肉食か」

「基本的には雑食でしょう。昆虫に生ゴミ、作物や死骸、“小動物”と、何でも食べるでしょうねゲコツゲコ。どうされますデン様。

静観し捕らえる隙を窺いますか？」

「この戯けが。問うでないわ、そのようなこと。あの害鳥を……止めるぞ。喧嘩両成敗である」

「ケロン、そうされるでしょうね、デン様は。それでこそその魔王、デンファレ様ですな。ワタクシ的にも、その少年は気になりますし……さりとて今回は、お手を煩わすには及ばないようですぞ」

「ぬ？」

害鳥の刺突から守るように、金髪の少年を駆けつけた男が突き飛ばした。難を脱した二人は何やら喧しく騒いだ後に、森の奥へと去っていった。

ぐぬう……颯爽と登場する機会を逃してしまったか、惜しい。

オレ様達は隠れていた草むらから出て、木の幹から口ばしを引っこ抜こうとしているアホ鳥の前に立った。

「さて、こやつをどうしたものか」

「いやぁーワタクシの小さい体では、とてもとても。ここはデン様ご自慢の怪力で、どうぞお願い致しますケロ」

「おべっか大臣め。そこまでの棒読み加減は、いつそ天晴れだぞ貴様……ふんっ」

例の如くオレ様は『魔力』を拳に纏わせ、めり込んだ鉄の口ばしを片手で抜き取ってやった。

これで帰ることが出来る。安堵からかオレ様は上機嫌で話しかけた。

「感謝しろビッグクロウリー。このオレ様を落とした貴様の無礼、

全て許そうではないか。貴様も長旅で疲れていたのだろうな。フハ、仕方のない奴め。もし非礼を詫びるつもりがあるのならば、次に乗る時は背中に座らすのだぞ」
八重歯を見せ付け、ぼんぼんと翼を撫でてやろうとした——のだが。

「グルガアッ！ ガアッ！！」

突然開かれたそれによつて、オレ様の頬が斜めに切れた。

「ッ——デン様！？」

取り乱すサルビア。

なんだ、どうしたというのだ。

何故か、頬が熱い。

ポタポタと垂れる、血の滴。

血。

手で傷口を拭う。

見た、赤い。

貴重な、オレ様の、紅い血液。

それが流れ出ている。

「なんの……つもりだ？ 害鳥」

猛り、何かが豹変していく。湧き上がり、何かが高ぶっていく。敵意を、向けるでない。オレ様を見るな。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

五感が奪われていく既知感。

束縛をされているように身動きがとれない。

全身を包んでいく黒々とした感情の渦。

いくら力んでも、抗えぬ。

暗視の魔術すら剥落され、陰り染まっていく視界。

美しいはずの樹や草花が、一転して醜悪なものへと変じた。

「ガアアッ、ガア——ッ！」

肉薄した鋼鉄の突起を、何者かが人差し指一本だけで受け止めた。それは弾くでもなく、防ぎ撥ね返すでもなく、躲^{かわ}し避けるでもなく、痛みに耐えるまでもない。本当に触れているのか、疑わしいほどの静止。

オレ様ではない、オレ様には出来ない。

「……さえずるな」

そう言つて、誰かが口に出す。

聞き覚えのない、低いトーンで。

「サルビア、こやつ^の罪状を述べよ」

「ゲ、コ。デン……様？」

「二度言わすな。余の、魔王の厳命であるぞ」

「は……はっ、その、魔鳥の罪状は……禁忌、『魔王に絶対の忠誠を誓う』に反しております」

「して、厳罰は」

「いえ、あ……っ……き、極刑で、御座い、ますが」

「ふぬっ、そういうことだ。命運尽きたなあ、貴様」

ほんの僅かに押しただけで、巨体なカラスが地に沈下していった。頭を垂らしたその姿は、屈服の表明に他ならない。

「ガ、ア……ガア……」

「クカカカッ、いい眺めだ。そそられる」

足蹴にされたカラスの悲痛な呻きは、その者にとっての快樂でしかないらしい。

なんという、おぞましさか。

オレ様に牙を向けたとはいえ、そやつも魔物——我が民の、一部であろうに。

許すまじ。

今すぐ、止める。

返せ。

「……ぬん？ おお、そうか、もう時間切れか。幕切れとは呆氣のないものだ。では幕引きとして、貴様には相応しい罰をくれてやる

う」

何を、する。

止める。サルビア、こいつを止めさせる。

そんな意見など、発せられることもなく。

ゴキンゴキンと、耳障りな音が二回聞こえた。よくない感触が二回した。

「クワアアア、グワアア！」

ひときわ派手に鳴くカラス。

その絶叫を契機として、オレ様は意識を失った。

第二話 表：勇者の素質 裏：魔王の片鱗（後書き）

ん長いつ、だから長すぎますよ第二話目も！

本当に申し訳御座いません。読者の皆様が、だれていないことを祈ります。

えー、今回のイラストは……表の主人公、勇者の息子であるポリジくんです。全体的に幸が薄そうな感じに書いてみました。

> i 3 8 2 6 6 — 1 9 9 1 <

次回こそは、もう一人の主人公であるデンファレのイラストを載せる予定です。
（何かしらの描写がないと載せられないですね、やっぱり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1298v/>

勇者の為の魔王軍

2012年1月3日15時47分発行